

川下の風景②

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【足るを知る者は富み、強めて行ふ者は志有り】

“足るを知る”方だった。元行政職で、財政や人事、福祉部局を渡り歩いた。定年後は、地域に請われて市議会議員を務めたこともあったようだが、あまりそのことは多く語らなかった。行政システムのことを良く知っているだけではない。何より、人というものを良く知っておられた。要支援の方だったから三カ月に1回の訪問時、よく世の中のことや、「人」について教えて頂いた。最後にお会いしたのは、亡くなる3日前。今思えば、ご自身で死期を悟っておられたのだろう。孫に本を送ったこと、定期的に子供たちと鰻を食べに行くこと。これまでそんなことを尋ねられたことはなかったが、「どうなるんやろうね。米津さんはご存知ですか？」吐血の症状について尋ねられた。珍しいことなのだ。40歳で妻を亡くされてから、自分は60歳で死ぬだろうと常々語ってこられた。それが16年も余分に生きさせてもらった、と。だから悔いも思い残すこともないし、大病を繰り返し、その都度救って頂いたが、もう二度とメスは入れない、と最後にも語っていた。それが、「自分はどうなるんだろう」と尋ねるのだ、私に。

自宅の洗面台には吐血した痕跡があったという。そのままベッドで亡くなられた。家人や救急車を呼ぶことだってできただろう。過去にはそうして生きながらえた。しかし、今回はそれをしなかったのだ。

「もう、十分に生きさせてもらった」そう思いながらベッドで、一人眼を閉じる光景が思い浮かぶ。足るを知る者は富み、強めて行ふ者は志有り。お金は沢山あっただろう。もっと贅沢しようと思えばいくらでも出来たはずだ。日々、ラジオを聴き、料理をこさえ、気が向けば本を読み、ステレオを聴き・・・そんな穏やかな日々の意味を知る人だった。

最後の訪問時、珍しく、彼と私の間に本が一冊置いてあった。ブックカバーが掛けられ、中身はわからなかった。いつもなら尋ねただろうが、その時は何となく藪蛇のようで聞くことがなかった。

今思い返せば、尋ねておけばよかったと思うし、知らぬままで良かったとも思う。

【埼玉川口のケアマネジャー事件について】

被害者が同業者であるケアマネジャーであるが故に業界に広がるショックは大きい。

亡くなった方々のご冥福をお祈りすると共に、詳細な事実を知らずに憶測だけで事件を評価することは差し控えたい。

一方で、自宅を訪問することが義務づけられている中で、密室内で援助関係という特殊な二者関係を築く業務であるが故に、今回のことを事件としてではなく、専門性から見立てておかないと、「ケ

アマネジャーの仕事は危険、怖い」と勝手なレッテル貼りが横行してしまうのは、この仕事のやりがいや挫き、人材不足に拍車をかける恐れもあるため、いくつかの視点から考察を試みたい。

以下は、一般的な考察であり、今回の事件の真意を問うものではない。

1. 援助関係という特殊性

事件の加害者と被害者の関係性が単なる援助関

係であったか、それ以外余地があったかは定かではない。

どちらかが一方的な感情を抱くということも往々にしてある。

ケアマネジャーに限らず、援助関係とは一般的な人間関係とは異なる特殊性を帯びている。

まず、そのことを援助者は忘れがちである。

困っているクライアントを助けたい、という利他的精神は福祉の根源であるが、これは利己的感情に昇華されやすい。

「せっかく一生懸命にやってるのに」

「なんでこんなことも出来ないのか」

援助者である「私」の思いに応えないことが許せない。

これは、逆も然りであって、クライアントから求められる承認欲求にも表れやすい。

いずれにせよ、円滑な援助関係を初期段階から形成しようと援助者が思うほどに、援助者は安易に信頼を勝ち得ようとする。

それは「寄り添い」や「共感」という援助スタンスに現れるが、果たして本来のその意味を援助者はどこまで理解しているのだろうか。

その理解の仕方によって、クライアントとの援助関係は大きく変化するし、冒頭のそれ以外の感情余地が入り込む隙間を与えかねない。

2. 家族システムへの関与という視点

当該事件の家族構造に限らず、世の中的には「8050」「9060」という高齢の親と、未婚の子世代が二人で暮らす家族構造に着目されやすい。

そこに注目が集まるのは、子が介護問題を抱え込み、追い込まれた先に親を殺める事件が後を絶たなかったり、親が子の将来を悲観して事件を起こすことが報じられることが多いからだ。

問題は、なぜそうなるのかという着眼である。

家族システムの視点で視れば、高齢の親子関係は

閉鎖的なシステムに陥りやすい。

高齢の親に介護が必要になれば、四六時中、介護者である子が付き添っていなければならない。

そうなる仕事は出来ない上に、経済的な困窮に陥りやすく、介護サービスの利用控えに繋がることで、物理的にも社会環境との接点が減少する。文字通り、自宅の家屋が強固な家族の境界線となり、その境界を跨ぐことが困難となってくる。

援助者は、その境界を越えて行く。

閉鎖的な家族システムにインプットを送り込み、家族内の相互作用に変化を起こそうとする。

問題は、そのインプットの仕方なのだ。

「もっと介護サービスを使いなさい」

「独りで抱え込んでダメ」

「介護者の負担を減らさなければ」

これらの正論は、誰にとっての正論だろう。

援助者側の勝手な正論は、家族システムにインプットされた途端、時に意味づけを大きく変える。

「もっと介護サービスを使いなさい」

⇒「きちんと介護が出来ていない」

「独りで抱え込んでダメ」

⇒働かず、良い歳をして親の介護を抱え込んでいる事への不安

「介護者の負担を減らさなければ」

⇒家族内の役割の喪失

家族システムの見立ては、家族歴の見立てでもある。

なぜ、今の現状に至っているのか。親の思い、子の思い。不安、愛情、憎しみ、役割変化。何事も第三者が言うのは容易い。それは、システムの外にいるからだ。逆にシステムの外にいるからこそ見えることがある。

3. 共依存という視点

老々介護、親と子の介護。

時に援助現場では「共依存」という言葉が当たり

前のように語られる。

その共依存は、大方、否定的に語られることが多いが、この言葉は非常に定義付けも曖昧で、言葉の使用者によって解釈も異なる。

「共依存」における関係性の視点として

- ・個人が抱える依存性
- ・ケアを中心に据えた相互関係性

つまり、依存関係性は、相互の期待と役割において保持されているし、時に個人の病理性によって強く縛られている関係性かも知れない。

援助者による「共依存」=悪という論調による介入は危険だ。

そこにある根深さを理解せず介入することで、クライアントシステム内で保持されている相互関係を壊しかねない。

エコロジカルな視点で考えれば、変化しないものなどない。

例えば時間

この1秒と、この先の1秒では世界が違う。

つまり、クライアントシステムがどれだけ変化を拒んだとしても、変化は必ずやってくるのだ。

永遠に続く共依存関係などあり得ない。

ケースの緊急性によるだろうが、今、目の前の関係性に短期介入しなければならないのか、それとも中長期視点で関わりながら徐々に変化を誘発するのか。

私の経験上、短期介入で上手くいったケースなどない。

4. 終わりに

今回は、事件の初報に触れて、同業者であるが故にいくつかの視点で考えたことを記述した。

恐らくワイドショーは好き勝手に解釈するし、SNSでは、根拠のない個人情報の暴露が進むだろう。

そんなことをして何の意味があるのか。

罪は罪として、真実は法場で解決されればよい。

私たちが考えなければならないのは、どうすれば防げるのかだ。

バス車内で起きた対人トラブルで、高齢者が刃物を振りかざす時代だ。

なぜ、街中を歩くのに刃物がいるのか。

トクリュウなどに見られる昨今の社会情勢が自衛意識を高めているのかも知れない。

だったら、こちらも自衛すれば良いのか。

防護服を着て訪問しても防げるものではない。

また、人材不足は今後5～10年で拍車がかかる。複数人数で訪問する余裕なども無くなるだろう。

ケアマネジャーは介護保険サービスシステムでは要の職種とされる。

だからこそ、その専門性と人材育成、確保は欠かせない。

2026.8.25 米津達也